

〈翻 訳〉

ヨハネス・コメニウス
『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）
30～47節

相 馬 伸 一*

（受付 2022年4月14日）

は じ め に

本稿は、17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス（Johannes Amos Comenius, チェコ語表記では Jan Ámos Komenský, 1592–1670）による『ある匿名の逆説的な習作に対する P. セラリウスの反論についての所見』（*Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam*, 1667年）の第30節以降のラテン語原典からの日本語訳と註である。

17世紀後半のオランダでは、近世哲学の祖とされるルネ・デカルト（René Descartes, 1596–1650）の影響のもと、ロデウィク・マイエル（Lodewijk Meyer (Meijer), 1629–1681）による『聖書の解釈者としての哲学』（*Philosophia S. Scripturae interpres*）に見られるように、デカルトの知性主義的アプローチを神学にまで応用しようとする企てが現れた。論争を挑んだ一人であるプロテスタント神学者ペトルス・セラリウス（Petrus Serrarius, 1600–1669）は、コメニウスに彼の反論についての所見を求め、コメニウスは、この機会に彼自身のデカルト哲学に対する批判的立場を明確に論じ、そうして書かれたのが本作品である〔相馬 2021b: 1〕。

この作品の書誌、意義、12節までの翻訳は拙稿「コメニウスのデカルト批判再考2——『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）を中心に——」（『佛教大学教育学部学会紀要』、第22号、2021年10月、1–16ページ）に、13節から29節までの翻訳は拙稿「ヨハネス・コメニウス『P. セラリウスの反論についての所見』（1667）13～29節」（『広島修大論集』、第62巻第2号、101–115ページ）に発表している。翻訳にあたっては、『コメニウス著作集』第18巻（*Dilo Jana Amose Komenského*, Sv.18, Praha: Academia, 1975.）所収のラテン語原典によった。原文のイタリック表記の部分は「 」、訳者の補足は〔 〕で示した。文中のデカルトの『哲

* 佛教大学教育学部、広島修道大学人文学部 非常勤講師

学原理』からの引用は、基本的に『デカルト 哲学の原理』（科学の名著 第Ⅱ期7『デカルト』、井上庄七、水野和久、小林道夫、平松希伊子訳、朝日出版社、1988年）の訳文により、[ページ数]で示す。聖書からの引用は、基本的に新共同訳によった。理解の便のために注を付す。

ある匿名著者の逆説的習作に対する

P. セラリウスの反論についての所見

友好的な要求に誠実に回答された、顕学者の執筆による所見

30. 「デカルトがその新しい哲学で提供する知恵として（聖書の鍵と見なされるに値するような）何か新しいものは他にあるでしょうか？」以下からして、それはありません。彼が見つかった待望の哲学において実験され、無数の図によって示されたのが、「地上の物質はスポンジ状であり、圧縮されたり膨張させられたり、凝縮したり希薄化したりする」ということです。そして、デカルトは、希薄化を軽薄で空疎な思想で偽りの幼稚な先入見として扱い、（『哲学原理』第2部5、6、7節で）、「希薄化は新しい特殊なものが介入した場合にのみ生じ、濃密化は特定の部分が蒸発あるいは消失した場合にのみ生じる」と主張します。これが誤りの最たるものであるということは、「アタナシウス・キルヒャー、カスパー・ショット、オットー・フォン・ゲーリケ、ボイル卿¹、そしてなお無数の者たちによる大量の新たな実験から明らかです。つまり、「ある量の小さなしずくやほこりによって増加や減少をすることのない水が管や空気中に閉じ込められていた場合、あるときは百倍以上もの広がりのある空間に広がり得るし、またあるときはさらに狭い空間に押し込められることもあり得るというのは議論の余地のないことです。」そしてこれは、アムステルダムで1659年に出版された同様の小冊子（『機械工によって反駁されたデカルト並びにその自然哲学』）で、「温度計、空気砲、おもちゃの銃、その他の同様の手に入るもの」による実験によって明確に示され、もうどこにも逃げ場はありません²。そして確かなことは、デカルトの凝縮と希薄化の記述が真だというなら、私たちにはこれらの人工的な（また単に想起されるだけの他の無数の）発明が足りないというだけでなく、「蒸気、雲、雨、雪、稲妻」等、そして（物質の激しい濃密化ま

1 アタナージウス・キルヒャー（Athanasius Kircher, 1602-1680）は、アリストテレス的伝統にありながら観察や実験を重視し、伝染病の原因が微小生物にあると主張した。カスパー（カスパー）・ショット（Gaspar (Kaspar) Schott, 1608-1666）はドイツの自然学者。オットー・フォン・ゲーリケ（Otto von Guericke, 1602-1686）は、マグデブルク市長を務め、真空の実験で知られる。ロバート・ボイル（Robert Boyle, 1627-1691）はロンドン王立協会の創設者の一人で化学者として知られる。

2 拙稿、「コメニウスのデカルト批判再考 1——『機械工によって反駁されたデカルト並びにその自然哲学』（1659）を中心に——」（『広島修大論集』、第62巻第1号、2021年）に全訳を紹介した。

たは稀薄化によって生じる）ものなども自然のうちにはないということになってしまうでしょう。というのは、デカルトがこれらの現象の理由を（三つの物質の天から考案された）³彼の原理から還元しようとしても、それらはすべて曖昧で、取るに足らず、不自然で、空疎なものだからです。つまり、何千もの実験によって、真で、自然で、平明であると認められるものと比較すれば、濃密化と希薄化の承認可能の形式がこの上なく明確に導かれるのです。

31. しかし、その男は、新たな想像を吟味しようと、〔第2部〕第8節で「量が量をもつ事物と異なり、数が数えられる事物と異なるのは、ただ理性の上でのことにすぎない」[67]⁴と記し、不条理に不条理を積み上げるのです。もしこれが真であるなら、天使には数がないことになります。それなら、実体でないものが物体として広がりをもつことになります。しかし、天使に数がないのなら、ダニエルが、「百万人が神のもとに参り、一億人が彼に仕えた」（ダニエル書7章10節⁵）と聞いたのは空耳だったことになります。

32. 彼は〔第2部〕10節に「空間すなわち内的場所と、その中に含まれている物的実体とが異なるのも、私たちに普通に理解されている考え方のうえでのことにすぎない」[68]というさらに逆説的なことを付け加えています。本当でしょうか？もし、量と量のあるもの、あるいは数と数えられるもの、場所と場所をもつものが異なるというのが単に思考におけることなのだというのなら、「持続と持続するもの、形状と物質、形容するものと主題、偶有性と実体も」単に言葉の上の違いということになります。なるほど、それらは今も分離できないものです。しかし、これが哲学することなのかどうか、つまり、事物と概念とは何かということを混乱させるのが哲学することなのか、私は知らないということをお認めしましょう。とはいえ、その男は、明晰判明に想像できるものは何でも、疑いの余地がないかのように理解されることを真に望んでいるのですから（第1部43節）、なぜ私は、抽象的に取り上げられた場所と持続の両方を真なる存在として認識すべきではないというのでしょうか？たしかに、生み出されるのは物体ではなく、物体を欠いた時間と場所だけで、おそらくそこにあるのは持続の流れであり、それが「前後に」分割されるというのが神の喜ばれるところだというのなら⁶、他方において、ここにいる私は、「前後、高低、左右の」延長の境界を明晰判明に考えることができたのでしょうか？それゆえ、指導者にして教師であるデカルト自身にとってこの上なく真なることは、時間と場所は実際に与えられており、それらは時間と場所をともなったものからは現実的に区別されるということです。つまり、よそで別のことを教えているなら、彼は一貫しておらず、不確実な哲学を伝えているということが確証されるのです。

33. 私はここに、この上なく動揺した精神のこの上なく純然たる虚栄心を生み出す類のもの

3 『哲学原理』第3部53節参照 [124]。

4 訳語の「観念」を「理性」に変更した。

5 ダニエルは旧約聖書のダニエル書に登場するユダヤ人。聖書の原文に対して数が誇張されている。

6 『哲学原理』第2部第1節をうけて書いていると思われる。

に数えきれないことが引き込まれるのを見ることができます。そして、この種のもののうち、「熱は極小の粒子の運動であり、冷は同じものの静止であるかその動きがより少ないかである」⁷と定め、最も強い対立をただ段階によって区別し、冷が積極的な質であることを否定します。それにもかかわらず、その対立が最も強い白夜の国のように頂点にある場所では、彼の主張の効果と影響は恐ろしいものになります。同様に、彼は、「自然状態の水に湿気があることを否定します。」それなら、自然状態で何が濡れるのでしょうか？ なるほど、どこかに最初の場所があることが流体にはふさわしいのですから、私が言うのは、基体は最初から自然的に湿気を備えているということです。さらに彼は、「金と空気のいずれかが同等の延長であると仮定した場合、金はそれ自体の中に空気より多くの物体性を含んでいるわけではない」⁸と言います。ああ！確かに、そのように延長された金は金ではなく、金のような空気になるでしょう。本当に、こうした詭弁が詰め込まれている哲学に利益があると思われているのを見過ごすことはできません。ディオゲネスがプラトンを傲慢だと踏みつけたのが広く知られていないためか、それとは別の誇りをもって、新しい不条理に場所を与えようと、受け入れられた先入見に戦いを挑んでいる者がいるのです⁹。

34. ここは、デカルトの逆説と異説を告発するのに適切な場所とはいえませんし、それはまた私の意図でもありません。ここで示そうとするのは、デカルトも「私たちは皆、多くの過ちを犯す」(ヤコブの手紙3章2節)という共通の規範から免除されることはなく、ましてや「間違いを犯さないという規範」として定められることはないというだけのことです。ここでは、類例がなく過度に巨大で不吉なものにのみ触れます。彼の『哲学原理』の第2部の最終節では、「物質、形、運動といった数学的な証明に従わないような、いかなる自然学の原理も容認しない」と明白に証言しています [100]¹⁰。えっ！これは櫓べそから舟を建造しようとするものではないのでしょうか？ なるほど、自然(そして自然学に関する知識)が全体であるなら、幾何学的に証明されるある視覚的な部分があるのは真でしょう。つまり、外部は単に自然的事物の殻であり、内側に隠されている核心からは何も表示していないというのです。「何千もの形状の多様な霊から生じる何千もの形状の自然の力がすべての自然的物体に散らばっているというのは疑いないことです。」デカルトは彼の自然についての学問全体でこれらのことについて何も伝えていませんが、したがって彼は自然的事物の器官が理解されたということを示す何も伝えておらず、この上なく表面的な知恵をいかなる代償にも値するだけのものにするとすることも何も伝えてはしません。ですから、本当のところ、(すべてのより真

7 『哲学原理』第4部46節を指しているかとも思われるが、原文とは異なる。

8 『哲学原理』第3部122節と関連していると思われる。

9 犬儒派(キュニコス派)の代表者とされるディオゲネス(Diogenes, 前412? - 前323)は、古代ギリシアの哲学者プラトン(Plátōn, 前427 - 前347)を揶揄したエピソードで知られる。

10 原文では、分割・形・運動になっている。

なる哲学が動物、植物、金属、岩石といった物体やそれらの物体の要素が満ちていることを認識し、他方で化学者が霊を引き出すことによって眼に示している）「自然的霊を、デカルトが彼の自然哲学全体からどれほどまで排除し、どこでも何の言及もしないことに価値を見出した」ことを不審に思うのは許されてよいでしょう。それはあたかも、「天使や霊を認めないサドカイ派」（使徒言行録23章8節）を復活させるのを望むのか、あるいは最後の日に人々がやって来て、（他のすべてにまさって唯一であることを望み）「自身と霊を持たない動物とを区別するだろう」（ユダの手紙19節）という、使徒ユダの予言を確認したいかのいずれであるかのようです。ところで、サドカイ派は少なくとも霊が物質から分離されることを否定し、（彼らが哲学者であるなら）霊が自身のうちや家畜のうちや樹木のうちにあることを否定しませんでした。しかし、これらの者たちは、全体として見れば、考えるものと延長するもの（つまり、精神と物体）以外は世界に何も残さず、見えない企てによって、今この時も教会からも聖霊を取り除こうとしているのです。

35. こうした場合、教会はどれほどの注意を必要とするのでしょうか！ 自然的事物に関しては（『哲学原理』第4部第1節等にあるように、彼は仮説と呼び、したがって世界がそのように作られたと信じられることさえ望んでいないといいますが）、それについてデカルトに同意できる事柄が哲学者や哲学をそれほどまでに刺激するのであれば、なぜ彼らはそれらを超自然的事物に応用したり、神学の教授において容認したりしないのでしょうか？ たしかに「難しいと見積もっても、私たちは、苦勞を重ねて地上にあるものや目に入るものを見出しますが、天にあるものを誰が探り出せるでしょう」（知恵の書9章16節）？ そして、「空想が許容されてその感覚」（ここで私が言うのは、見ることも感じることもでき、完全に否定されるか誤解させられるものことです）「に力をもたらず場合、それが信仰に対して何もしないということがあるのでしょうか？」デカルト主義者が私たちを導こうとしているのは、どれほど危険で滑りやすい場所なのでしょう！

36. 「哲学の頂点は（この上ない賢人が言うには）、すべての事物の最初の制作者と究極の目的を知ることです。そして聖書から遠ざかれば、これら二つのことは、あなたが理解するように見出されるでしょう。それゆえ、プラトンの作品（『パイドン、または魂について』）において、ソクラテスはこれらのことに関する無知を嘆き、読者の涙をさそったのでした。というも、彼は、これらのことが正しく理解されれば、すべてのものである自然への扉が開かれると理解していたからです。しかし、それらが無視されるなら、私たちの哲学はフィロモリアン（愚かさへの愛）」です。もしそうなら、私たちはデカルトの哲学の何について認めるのでしょうか？ デカルトは、その計画のために決して聖書を用いず、最初の作動者についてもほとんどまったく言及せず、あらゆることにおいて自分自身にも私たちにも目的についての探求を禁じたのではないのでしょうか？

37. 「しかし、匿名著者はデカルト派のより完全な哲学を見つける必要があるなら、どうなるのでしょうか？」それとも、聖書の解釈として受け入れられるように要求しようとするのでしょうか？「お答えしましょう。」たとえ、「世界の配置、元素の力、時間の始まりと終わり、年の経過、星の配置と動物の本性、そして人間の思考」（知恵の書7章17節¹¹、つまり人間の精神が想像できるすべて）「について知っているような」、ソロモンの哲学のように完全な哲学が与えられるべきであるとしても、「それにもかかわらず、それはまだ聖書の謎の解釈に適合しているとはいえません。」なぜなら、聖書は人間の思考を示しているのではなく、神の思考を示しているからです。そして、空が大地よりも高いのと同じように、これらは私たちの思考よりも高いのです（イザヤ書55章9節）。ゆえに、「下位の者は上位の者について」、（つまり、元素が鉱物について、鉱物が植物について、植物が動物について、野獣が人間について、人間が神について）「判断を下しはしないがゆえに」、「感覚が理性について判断することもできませんし」、理性が信仰についての判断を下す、つまり哲学が神学についての判断を下すことはできないでしょう。むしろその逆なのです。

38. 「ですから、匿名著者に事物の本性を逆転させるのをやめさせましょう。さもなければ、彼がその不条理を認めるまで、不条理に固執させておきましょう。」とはいえ、哲学が聖書の解釈者であるということが普及した場合、その先はどうなるのでしょうか？今後ただちに「預言者のための学校」や使徒のための学校は無用になり、哲学者の学校が必要になるでしょう。つまり、闇の力との対決において、「信仰という盾」は必要でなくなり、悪魔のすべての火器を消し去るには理性という盾で十分だということです。神の言葉である「霊という剣」ではなく、聖書の解きがたい結び目をすべてほどく、論理という剣で十分だということです。もう「ニコデモが再生する」必要はなく、研ぎ澄まされるだけでいいということです¹²。「自己否定というくびき」は誰にも十分にはかけられなくなり、誰もが自分自身と自分の精神の力に依存することを学ぶようになるのです。今や、地上の「アカデミア」が天のアカデミアに従属する理由はないということです。むしろ、天のアカデミアが地上のアカデミアに従えばよいということです。もはや、アウグスティヌスが、「天には心を教える聖座がある」¹³とか、また「あなたが理解できるように信じなさい、信じられるように理解しなさい」（説教43）¹⁴と言っている

11 正しくは、知恵の書7章17節～20節の内容。

12 新約聖書ヨハネの福音書に登場するユダヤ人政治家。イエスに敬意を払い、擁護した。

13 神学者アウレリウス・アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) の『ヨハネの手紙一 講解説教』(Tractatus in epistolam Iohannis ad Parthos) の三の13節にある「心に教える方は天にその椅子を持っています」(岡野昌雄, 田内千里, 上村直樹, 茂泉昭男訳, 『アウグスティヌス著作集』, 第26巻, 教文館, 2009年, 453ページ) が参照されている。

14 アウグスティヌスの『ヨハネによる福音書講解説教』(In Iohannis Evangelium tractatus CXXIV) の第29説教6の一節, 「あなたは信じるために理解しようと求めてはいけない。かえって、あなたは理解するために信じなさい。」(金子晴勇, 木谷文計, 大島春子訳, 『アウグスティヌス著作集』, 第24巻, 教文館, 1993年, 88ページ)。

るのは問題ではなくなります。「そこでは信仰はどうなるのでしょうか？」何もありません。あるのは、空疎な名、信仰の残骸、成就しない信仰の霊です。「真理に耳を貸さないように魅了する愚かなガラテヤ人ではないでしょうか？」善良な人たちよ、あなたたちは、尋ねるすべての者に与える天の博士（聖霊）についてのキリストの約束から自分自身を除外しているのです！ 霊的な事柄についての知識が人間精神によって求められ整えられるのが魅力的に見えるという皆さんに、私は言います。あなたたちに光を放つ教会という太陽は本当に消えてしまったのでしょうか、それとも地平線の下に深く沈んでいるために、（自然的光の）私的な松明が灯される時が来ているのでしょうか？ しかし、あなたがたがそれに火を灯せば、教会という家に明らかに勝ると思いますか？ 神がすでに、「お前たちは皆、火を灯し、炎に包まれ、お前たちが燃え立たせる火の光と炎の中を歩く。私の手がこのことを定めたが、これによってお前たちは苦悩のうちに横たわることになるだろう」（イザヤ書50章11節）と言われたことを、あなたに言われたらどうでしょうか？

39. そしてさらに、「哲学は聖書の解釈である」という匿名著者によってあなたが征服されてしまったならば、ソロモンやダビデ等のすべての聖人がこれまで信じていたことは真理ではないということになるでしょう。「律法は光である」（箴言6章23節）、「神の言葉は私たちの足の灯であり、私たちの道の光である」（詩編119編105節）といった言葉は真理ではないこととなります。そして今や、哲学が聖書の解釈者であるなら、それは（事物や言葉の）曖昧なものに光をもたらすための解釈者なわけですから、これらの言葉はすべて哲学に帰せられることとなります。真なる哲学と偽なる哲学を区別する術を知らず、哲学によって自身とキリスト者にとって恐れるべき何かがあると考えた虚栄心のゆえに、あなたは使徒に対して有罪を宣告することになるでしょう。さらに、神託を理解するのに非常に役立つことをあえて非難したがゆえに狂気であると宣告することでしょう。息子であるキリストの受難よりも私たちがより柔軟に悲惨さに耐えるための道を見出せず、さもなくば、同じ息子への軽蔑とは異なる別のほどよい傲慢さを改めて私たちに教えなかったがゆえの愚かさのために、神が非難され得ないのはなぜでしょうか？ 罪人のために逆に罪とされた正しき者によって、私たちの罪の贖いその他はある（コリントの信徒への手紙二5章21節）、罪なき人の死がなければ死は廃されなかった（ローマの信徒への手紙5章10節）。理性と哲学という広場においては、これらはすべて混じり気のない狂気ということになります。さらにいえば、旧約聖書で教えられた犠牲はすべて馬鹿げているということになります（というのは、「他人の死によって救済を願うのは愚かそのものであり」、この上なく賢明なカトーの知恵が指示しているからです）。神の書に書かれて明かされているすべても、それらのうちに人間理性たる知恵が非難しそうなことを理性自身で見出してしまおうからから、やはり愚かということになります。こうして、新約聖書と新約聖書が伝えるのは、その宗教に関する行為ということになるでしょう。

40. 最終的にすべてを要約するなら、匿名著者がキリスト者に忠告し始めたがゆえに、この先も彼が説得をしていれば、悪魔も今まではできなかったわけですが、これからは勝利を保持し、トロフィーを掲げることができるだろうということです。「彼は、ついには、彼の目には見えない忠実な信仰という盾を手で振り払い、信仰の創始者と完成者にお尻を向けたのです。」(ヘブライ人への手紙12章2節) 何と恥ずべきことでしょうか！ まだなおも続ければ、「最高の哲学者が最高の神学者であるなら、最高の神学者は悪魔だ」ということになります。なるほど、聖書のあらゆる微細なことを研究している神学者は、それゆえに問題を最も明晰に定め、それによってもつれた結び目を解くことについては、確かに熟知しています。あえて父なる神に語りかけるので、それはたとえ些細なことでも有用でした。この最も単純なキリスト者でさえ、「信仰を通して」学び、知り、行動するのです。ゆえに、有名な言葉がデカルトの肖像に添えられたのです。

「長い影を引いた忌まわしいほどの闇から、幾世紀にもわたって近寄り難かった真理を引き出した最初の人等々。」

(匿名のあなたが自画自賛という庇護を盾にしたとしても)、それはあなたを赤面させるものです。あなたがもっと用心深くしよう思うほどの誤りを無謀にも犯してしまったら、あなたは正道に戻るかもしれません。というのは、あなたがキリスト者であるなら、世界の光であるキリストの唯一の集いで言われていることに追随するのを軽視すべきではないからです。哲学者の息子たちが(この時代の問題に関して)非常にすぐれたひらめきだということであなただけを過度に称賛するなら、これは天の光の息子たちにとって何だということでしょうか？ これは別の問題です。

41. しかし、信仰篤きキリストに従って「信仰篤き」キリストのうちで実践している、キリストの民であるあなた方は、その告白を守るのです！ そして、神の信仰から人間の推論へと引き付けられたことに苦しんではなりません。「あなたの神である主を信じるのです。そうすれば、悩まされることはありません。その預言者を信じなさい、そうすればすべてが繁栄する」(歴代誌下20章20節)。「世に打ち勝つ勝利、それは信仰である」(ヨハネの手紙一5章4節)。そして、このキリスト者の信仰とは、信仰であって推論ではなく、神への信頼であって自分の精神への信頼ではなく、すべての信じる者の救済のための神の美徳であって、自分の喜びのために自分を飾り立てようという私たち自身の美徳ではないのです。キリストのみが私たちの律法者であり、私たちの指導者であり、私たちの光であり、私たちの希望のすべてなのです。「もしあなたがわたしの中にとどまり、わたしの言葉があなたの中にとどまるならば、あなたが求めるものは何でもあなたに与えられるでしょう」(ヨハネによる福音書15章7節)とされています。しかし彼は、「私たちをすべての真理に導くために聖霊が与えられることを約束し」、求めるようにと忠告しました(ルカによる福音書11章13節、ヨハネによる

福音書14章16, 17, 26節, 同16章13節）。私たちはかくも信仰篤き人を信用しないのですか？ 砂漠のイスラエル人は、約束の地のために彼らに与えられた指導者たるモーセを拒絶し、彼らをエジプトに連れ戻そうとした指導者を自分たちの中から自分たちのために選ぶという罪を犯しました（民数記14章4節）。天の指導者が万人の請願者である聖霊に約束した後に、（マタイによる福音書23章8節及び9節の明確な禁止に反して）私たちに地上の者が押し付けられることで苦しむならば、私たちはどれほどの罪を犯すことになるでしょうか？ それはどのような指導者でしょうか？ 頑固で反逆者の息子たちにとって常に指導者であったのが「自分の理性」です。これこそが指導者となり教師となり、人でありながら自らを神にしたキリストに対して不平を言うようにパリサイ人に教え、そして、キリストが、発生によってではなく、他の創造物に先立って創造された神の子であると認められているのを変更しようとした「アリウス派」¹⁵に教えたのです。しかし、「フォティヌス」はなるほど発生によって生まれたでしょうが永遠ではなく、キリストは人の父なしで処女である母親から作られてあり続けています。そして「ソツツイーニ派」¹⁶は、二つの異なるものを相互に呼ぶことはできないとして、「人」は「神」と呼ばれ得ないといいます。さらに、「ムスリム教徒」は、神には妻がないので、彼が神の子であるとは決してないと言うのです。この指導者の途方もない非道をご覧ください！ 何と空疎なことでしょうか！ この指導者の追随者たちも何と愚かなのでしょうか！ 現世の途上で（いくつもの妄想の虜になって）過ちを犯さざるを得ないとしても、私は、自分自身や私個人の妄想に導かれるよりは、神と神の言葉によって過ちを犯すように導かれる方を選びます。

42. 最大の注意が必要なのは、「神の言葉において信仰が過大評価されていると神がこれまでに不平を言われたという事例が聖書には明かされていないということです。ところが、そこで人々が常に自身の理性の導きに従うのを選択したため、その注意についての怠慢はかつてないほど頻繁になっています。」そこから、勝利者がその信仰によって神に栄誉を与えるものは何でも、聖なる英雄のうちに数えられます（ヘブライ人への手紙11章）。「ゆえに、人間全体にとってよりよいことは、神の簡明な言葉から自分自身へと後退するよりも、自分自身から神に、神にだけに耳を澄ますことであり」、視覚を自分自身に帰属させることに闇雲になるよりも、自身の目が見えていないことを認識しキリストに目に塗る薬をもらうことです。このようにして、真理それ自体がキリストという真理が生まれたことを証明しています（ヨハネによる福音書9章39, 41節, ヨハネの黙示録3章17, 18節）。神は、自身に絶望し神に希望

15 キリストの神性を父なる神よりも下位に置く神学説をとる一派。

16 三位一体説や予定説、キリストの贖罪、原罪、キリストの神性を否定する説をとる。イタリア人のレリオ・ソツツイーニ（Lelio Sozzini, 1525-1562）が唱え、子のファウスト・ソツツイーニ（Fausto Sozzini, 1539-1604年）が広め、ポーランド兄弟団を創設した。コメニウスと長い論争を繰り広げたダニエル・ツヴィッカー（Daniel Zwicker, 1612-1678）もこの一員であった。

を置く者を捨てることはできなかったのです。他方で、(自分の思考のなかで消えてしまうような(ローマの信徒への手紙 1 章 21 節)) 自分自身をあえて自分自身で引き渡そうとする者たちは、まさしく神を荘厳するものなのです。そのことは聖書全体を通して容易に見て取れます。

43. 「聖書の敬虔な読者が(いかなる有害な誤りもない) 神の言葉から神の精神を同時に知覚するためには、何をすべきでしょうか？」 私たち皆がそれを真に教えられるには、哲学に避難する必要はないのです。最良の教師が私たちにそれをこの上なく完全に教え、この規則を彼の監査官に伝えたからです。「神のご意志を行いたいのなら、この教えが神から来ているのかどうかを考えさせよ」(ヨハネによる福音書 7 章 17 節)。ゆえに、キリストの言葉でキリストの精神を知りたいと思う者は誰でも、彼の人生全体をキリストの教えに一致させるように努めさせてください。そうすれば、ただちにその照明を手にするでしょう。これなくしては、固有の理性も小石やかかけらの指導者にすぎません。カファルナウムの者たちに見られるように、理性の分析によってキリストの言葉を調べ、彼らの間で口論が起きたようなこととなります。そこでキリストは、彼らを道に呼び戻すことができるように、精神の鋭敏さではなくテオ・ディダスカリーアン¹⁷を彼らに勧めました(ヨハネによる福音書 6 章 45 節)。それが、「弟子たちが自分自身に依存しているのを拒否し、神に依存せよ」と力強く示された理由です。

44. 「そこで、神が直接に私に教えてくださると期待できましようか？ 何の手段も用いられないのでしょうか？」 お答えします。「私たちには憐れみ深い主がおられます。私たちが悩み、神の言葉を理解したいという大きな願望を持っているのを見て、何も欲しないようななどなさいません。それどころか、ただちに私たちの精神を解明し、その素晴らしさを最大限に惜しみなく与え、純粋な勤勉の知恵の代わりに、すべての真の教えを私たちの魂にまいてくださるのです。」これらはクリュソストモス¹⁸の言葉(創世記について説教 24)であり、こうして善良さにおいて主について認識するなら、心の純粋な者たちが主を求め損なうようなことは決してないというのです。というのは、神が聖書の中でその言葉と霊で教えたいと思った人々に公言したのはまったく明らかなからです。詩編 32 篇 (8, 9 節) のように、「馬やラバのようではなくともやはり頑固な者たちに理解をもたらずでしょう。」「信仰をもって祈る人々と、神が明かされるすべてのことを信じ、彼が命じるすべてのことを行い、彼が約束するすべてのことを期待することに」同意する心づもりができた人々に、「霊と知恵を与えるでしょう」(ルカによる福音書 11 章 13 節、ヤコブの手紙 1 章 5, 6 節)。これは、アブラハム¹⁹,

17 ギリシア語で「神の教え」という意味。

18 イオアネス・クリュソストモス(金口イオアン, Ioannes Chrysostomos, 354?-407) は、東ローマ帝国コンスタンティノポリスの主教。

19 ノアの洪水後、神によって選ばれた最初の預言者とされる。

ダビデ、ソロモン、そして神に従順でも肉と血をもってその計画には招かなかったすべての人々の場合において、まったく明らかなことです。というのは、「それで神は、ご自身をおのく者の意志とされ、彼らの嘆願を聞くからです」（詩編145編9節）。「それで神は、アブラハム自身が主の道を守り、同じ職務についてその子たちに教えるのをご覧になる際、なさろうとしておられることをアブラハムには隠されないのです」（創世記18章19節）。それから神は、ダビデが「あなたの律法の不思議が見えるように私の目を照らしてください！と心から」叫んでいるのを聞くと、「ダビデを敵よりも賢くし、博士たちよりも理解力を高められるのです」（詩編119編18節）。「それからキリストは、弟子たちが、彼が教えることに従い、友にふさわしいことをするがゆえに」、（奴隷は主人が何をするかわからないので）「わたしはあなたを奴隷とは呼ばず、友と呼ぶ。なぜなら、わたしが父から聞いたすべてのことをあなたに知らせたからだ」と弟子たちに言ったのです（ヨハネによる福音書15章14、15節）。敬虔なるキリスト者の皆さん、この共通の救い主がどのようなことを言って約束しているのか聞いていますか？ あなたが彼を真実であると信じるなら、あなたも彼の友人の中に数えられ、あなたに必要なものが隠されないことを期待してよいのです。

45. 「あなたがその目的において神と一体となるならば、あなたが目的に至る途中で引き下がるのを神は許されないでしょう。」なぜなら神ご自身があなたの目的から引き下がることはできないからです。ゆえに、あなたも、最高の聖なる意志とともに同じことに向かってとりくむことから引き下がることはできないのです。とはいえ、神のご意志とは何でしょう？ 「それは、すべての人が救われ、真理の理解に至ることです」（テモテへの手紙一2章4、5節）。「ですから、真理の理解に至ることが誰にとって重大な目標であるなら、神の善を信じなさい！そして、朝に種（神の言葉という種）を蒔き、夜も手を休ませるな」（コヘレトの言葉11章6節）とあるように、彼が命じていることをしなさい。「それは、種を地面に投げ、昼夜寝起きする農夫がするのと同じようなものです。農夫はそれがどうしてかは知りませんが、種は芽を出し、収穫まで成長します」（マルコによる福音書4章26、27節）。それは、（栄養がどうなるかといった）自分の自然な体質のことをまったく知らず、食物を詳細に調査しようとはしない凡人と同じようなものです。彼らは、食べたり飲んだり、寝たり起きていたり、働いたりよく休んだりしてとても健康ですが、用心深い探求者の方が怪我や死にさえ見舞われるものです。こうして、理解されていないことをあえて信じ、肉のためにあえて試練を課し、理性では信じられないことにあえて希望を抱く、そうした敬虔なキリスト者は、問題を抱える恐れや困難に遭遇せず、神と彼の言葉のうちで喜びを得るのは間違いないということは明らかです。ここからわかるのは、詮索好きな議論家が十分に安全だなどということはほとんどないということです。

46. 「ゆえに、天で私たちを待っているアカデミアを信頼して待ち望めば、間違いありませ

ん。」天の下にいる私たちは、私たちのために秩序正しく組み立てられた三学級の学校を通過することだけを追求すれば、混乱することなどないのです。「幼児期の霊的な学校」を設けましょう。そこでは、私たちの教師はすべての被造物であり、あらゆる方法で私たちの感覚に影響を与えます。「青少年の進歩のための学校」を設けましょう。そこでの私たちの博士は人間であり、人間を理性にしたがって教授します。しかし、ここにはまた、より「高次の学校」が設けられるべきです。そこには、(目に見える聖書という書が与えられていることは間違いありませんが、それを通して私たちの精神に神聖な感覚を吹き込み、慈悲深い目的に仕えるという動機を与えてくれる) 秘された部分がある見えない博士がおり、私たちを形成してください。天の下の最高の学校の最高の博士の代わりに、(きわめて多様な方法でみだりに取り入ろうとするような) 別な人間をまたもやそこに据えようというのでしょうか？ そんな気は毛頭ありません。私たちは後退ではなく進歩を遂げなければなりません。最も奥深くにある人間の心をして、自身と自身のうちや自身の周囲に持っているものを喜んで省察し、その自然的特徴に喜びを見出させようではありませんか。にもかかわらず、「地上の博士たちによって私たちは地上から高められてはいない」(ヨハネによる福音書 3 章 13, 27, 31, 32 節) のはこの上ない事実です。ゆえに、恐れなければならないのは、人間の博士に教えられることに満足せず、すべての真の博士であるメシアを待っていたサマリア人よりも、私たちが遅れているということです(ヨハネによる福音書 4 章 25 節)。あるいは、裸の人ではなく、神の霊に満ちた人に王国の統治は委ねられるべきであると意見を述べたファラオ(創世記 41 章 38 節) よりも遅れているのです。要するに、この最高の学校において、栄誉ある聖座に向けられた座席への敬意から離れ、人間の知性を突き出すという道にはずれた行いをしているのが彼らなのです。「自然についての知識は、すべてに備わっている理性の自然的光を通して理解され得るものです。神から靈感が与えられる知識は、神の光なくして把握され得ないのです。」(サヴォナローラ、『ドミニカ派の礼拝についての解説』 I にあります²⁰⁾。

47. 「ここまでにしますが、この上なく輝かしいものであると評価していますので、神の友人であるあなたの著作と一緒に送ってくださるようお願いします。」ヨアブがアビヤタルとともに何かの偶然でアドニスの王を宣言し、宴会を盛り上げ、トランペットを吹き鳴らしてもよくない²¹⁾ので、常に自分に満足してください。いずれにせよ、天のソロモン、預言者ナタン、それとともに母親のバトシェバのところに彼らがいないようにと願います。そこであな

20 15世紀末、フィレンツェで神権政治を行ったドミニコ会修道士ジローラモ・サヴォナローラ(Girolamo Savonarola, 1452-1498)が参照されている。『コメニウス著作集』第18巻には、『ドミニカ派の礼拝についての解説』I (*Expositio I. in Orationem Dominicam.*) からとあるが、原文にはあられなかった。

21 ヨアブはダビデの甥にあたる軍人、アビヤタルはダビデの治世中に大祭司となった人物。ザドクは、アビヤタルとともに祭司で、王位継承争いの際、ソロモンを支持した。

たは、彼らのなかでも敬虔なザドクの役を担うのです。ザドクは、ソロモンに聖油を注ぎ、神のすべての民が、「キリストよ、あなたの天の知恵をもって、ソロモンを天に住ませたまえ！」（列王記上1章）と叫ぶようにトランペットを高鳴らせ、「私たちがすべての聖徒とともに求める慈愛に根づいて立つように、私たちの心の中にある信仰によって治めるようにさせたのです！」「慈愛こそが、キリストの善意の広がりであり長さであり高さであり深さなのであり、それはすべての名声よりも高くそびえています。」「私たちは至るところ神に満たされているといてよいほどです！」「私たちの内で働く力に従って、私たちが求め理解するのを超えて、すべてのことをいくらでも行うことができになり、キリストを通していつの時代のどんな年齢の者にも教会における栄光をあらしめるお方に！」アーメン（エフェソの信徒への手紙3章17節など）。

（完）

参 考 文 献

Johannes Amos Comenius 1975: *Dilo Jana Amose Komenského*, Sv.18, Praha: Academia.

デカルト 1988:『デカルト 哲学の原理』（科学の名著 第Ⅱ期7『デカルト』、井上庄七、水野和久、小林道夫、平松希伊子訳）、朝日出版社、1988年。

相馬伸一 2021a:「コメニウスのデカルト批判再考 1——『機械工によって反駁されたデカルト並びにその自然哲学』（1659）を中心に——」、『広島修大論集』、第62巻第1号、147-165ページ。

相馬伸一 2021b:「コメニウスのデカルト批判再考 2——『P.セラリウスの反論についての所見』（1667）を中心に——」、『佛教大学教育学部学会紀要』、第22号、1-16ページ。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「教育思想史のメタヒストリー的研究」（17H02673）による研究成果の一環である。翻訳にあたっては可能な限り検討を加えたつもりだが、思わぬ読み違いもあるかもしれない。ご批評を得て、別の機会に改善を図ってみたい。

Abstract

Johannes Amos Comenius:
*Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem
paradoxam anonymi cujusdam*, section 30–47

Shinichi SOHMA

This is Japanese translation from the original Latin text of the section 30–47 of the tractate entitled *Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam* (*A Judgement of the Counterargument of P. Serarius*) published in 1667 by Czech thinker in the seventeenth century, Johannes Amos Comenius. The translator discusses the significance of the work and shows the Japanese translation up to the twelfth section of the work in the article entitled “A Reconsideration on Comenius’ Criticism to Descartes 2: Focusing on His Tractate *Judicium de P. Serarii Responsione* in 1667” in: *Bulletin of The School of Education*, Bukkyo University, vol. 20, November, 2021, pp. 1–16, and shows the Japanese translation from thirteenth to twenty-ninth section of the work in the article entitled “Johannes Amos Comenius: *Judicium de P. Serarii Responsione ad Exercitationem paradoxam anonymi cujusdam*, section 13–29” in: *The Studies in the Humanities and Sciences*, Hiroshima Shudo University, vol. 62, No. 2, March, 2022, pp. 101–115.

* Professor, Bukkyo University

** Part-time Lecturer, Hiroshima Shudo University